

社会

男女平等？ 30年間「実力社会」アメリカで奮闘してわかったこと | ケイン岩谷ゆかり「女性ジャーナリストの視点から」

Text by Yukari Iwatani Kane

ケイン岩谷ゆかり 1974年、東京生まれ。米ジョージタウン大学外交学部卒業。1996年にロイターに入り、2006年～11年、ウォールストリート・ジャーナル記者。15年からカリフォルニア大学バークリー校ジャーナリズム大学院講師。著書『沈みゆく帝国 スティーブ・ジョブズ亡きあと、アップルは偉大な企業でいられるのか』（日経BP社）ほか



海部美知さん（左）と筆者（右）

白人至上主義者らと反対派の衝突で死傷者が出たバージニア州シャーロットツビルの事件について、「責任は双方にある」との見方を示したトランプ大統領。日々、ニュースで分断が伝えられる米国で、グーグル社員が公表したあるメモが大きな論争を生んだ。

米国で活躍する女性ジャーナリスト・ケイン岩谷ゆかり氏の今回の連載は、同じく米国で活躍するテクノロジーコンサルタントで作家の海部美知さんを迎え、米国における女性の働き方について話した。

「実力社会」のアメリカで

日本に帰国して家族や友人と再会すると、決まってジャーナリストとしての私の仕事と、私がそのとき取り組んでいることの話になる。私としては気恥ずかしいのだが、皆よく褒めてくれ、そして「やっぱりアメリカは実力社会だね」的なことを言われる。

そんなとき、私はたいていうなずいておく。それは彼らが米国と日本を比べてそう言っているのを知っているからだ。

だが私は、いつも少しばかり心地悪い思いもしている。というのも「アメリカは実力社会」というのが、いかに真実でないかを知っているからだ。

日本ではあまり大きく報じられなかったようだが、米国のテック業界は先月、グーグルのある上級ソフトウェア・エンジニアが書いたメモをめぐって怒りの嵐に包まれた。

10ページにわたるそのメモは、ダイバーシティ（多様性）を重視するグーグルの取り組みを批判するものだった。「グーグルのイデオロギー的エコチェンバー」と題するそのメモは、思想的に左寄りの企業であるグーグルに、イデオロギー面でのより大きなダイバーシティを要求する意図で書かれた。

だがその過程で筆者の男性は、テック業界に女性が少ないのは、女性に対する偏見や差別のせいではなく、男女間の心理的、生物学的違いゆえだと論じる。彼は、女性は一般的に「アイデアより感情や美的感覚」により開かれており、「社会と関わる仕事や芸術的な仕事」を好み、より神経質だという。

シリコンバレーで働く女性のほとんどがこのメモに憤慨したが、悲しいことに、その見解に驚きはしなかった。女性の多くにとって、この一件は、すでに知っていることの再確認でしかなかった。

私自身は、痴漢行為や性的誘いといった、あからさまな嫌がらせを受けたことはない。だが大企業のCEOに、とりわけ若い頃は、「ハニー」や「ディア」と呼びかけられたことはある。記者として一人前になった現在は、たとえば、取材相手が男性記者より私に対してのほうがかしこまって接するといったように、より目に付きにくくなっているものの、そのバイアスはある。

“グーグルメモ”をシリコンバレーの女性はどう受け止めたのか

グーグルのメモをめぐる騒動を受けて、私は友人の海部美知さんに話を聞きたくなった。

彼女とは約20年前、私がロイターの記者だった頃、ニューオーリンズで開催されたテレコム関連の会議で親しくなった。米国における最も古い日本人の友人（先輩）の1人であるだけでなく、成人になってから渡米してこの国に根を降ろした、私の知る数少ない知人だ。

ティーンエイジャーの男の子2人の母親でもある彼女は、テクノロジー・コンサルタントと作家の二足のわらじを履く。私はとても尊敬する彼女と、シリコンバレーで働いてきた者同士、お互いの経験について共に考えたかった。

以下は3時間に及んだ彼女と交わした議論の抜粋である。私たちはグーグルのメモのことから政治、尊敬する女性、私たちのキャリア、そして仕事と家庭の微妙なバランスに至るまで、さまざまなことについて話した。

ケイン あのメモの内容、どう思いました？

海部 選挙の頃から「実はグーグルのなかにも隠れトランプ支持者がいるから、うっかりしたこと言えないんだよね」とグーグルに勤めている友人から聞いていたので、いよいよ出てきたなという視点で観てました。

その前後に、ベンチャーキャピタリストが女性に嫌がらせをしたというセクハラ問題もいくつか出てきましたよね。

ケイン 私はサンフランシスコに住むのは9年目になりますが、女性としてのやりにくさはすごく感じていました。

数年前までは、「それは女性差別だ」とは言えない空気がありました。いま振り返ってみると「あれはそうだったんだ」と思うこともあります。

たとえば、アメリカでHaunted Empire（日本では『沈みゆく帝国』）を出版した時にアップルファンボーイやシリコンバレーの人たちのネガティブなコメントが過剰だと感じてました。

だけど、もしあの本を書いたのが男性記者だとしたら、もう少し反応は違ったのではないかと最近思いはじめています。同じ女性でも白人が書いていたら、また違っただろうなとも思いますね。

海部 ゆかりさんの話にすごく痛感してます。シリコンバレーでは女性はマイノリティの立場、ここは男性社会だということは、常にひしひしと感じています。ここに限らないですけどね。

最近、スタートアップ企業に話を聞かせてほしいとお願いする、営業に近い仕事をしているのですが、あるオハイオのお客さんは、何度言っても返事がこなかったのです。ひたすら砂漠に水をまく感じだったのですが、仕事を一緒にしている相棒の白人男性がアプローチするとすぐに返事が来ました。

私に能力がないからなのかと思いましたが、たまたま相手が女性だったりするともう少し反応が良かったりするんで、これは何なのかなということは常にありますね。

いままでは、私がアジア人だからだとか女だからだとか、言い訳にするのはいけないことだと思っていたので、これは自分が至らないからだ、よくないからだと言いつけていました。

ケイン それは多くの女性、そしてとりわけ日本人の女性に見られる典型的なリアクションではないでしょうか。

海部 そう。でも最近は、やっぱりこれはそうなんだと思うようになり、相棒に「悪いけどこれは私がやるより、あなたがやったほうが効率がいい」と説明して仕事を譲ることがあります。

ケイン 私も言い訳になると思って、いままでは言いにくかったですね。本が出版された直後にこんなこと言っていたら、絶対叩かれていたと思いますね。

海部 そうでしょうね。

トランプ大統領が空気を変えた？

ケイン そういう意味では空気が変わりましたよね。

でもそれって不思議ですよ。黒人に対して差別的な発言をしたり、女性をリスペクトしていなかったり、どのグループに対しても嫌悪を見せる大統領の下なのに。個人も企業も、「もっと世の中を改善しなければいけない」という空気変わったのでしょうか。

海部 枠が緩んできたのかもしれないね。“みんな平等に”と努力することがいいこと、という単一方向的なところがばらけてきた。

そんなの関係ないとネオナチみたいなことを叫ぶ人たちはそれが正当だと思ってやっているわけで、企業でも経営者個人の考え方だとか、個別のグループの考え方だとかがむき出しになっきてますよね。

あのメモを出した従業員もトランプの刺激があって出したと思います。以前なら真っ青なカリフォルニアの空の下の真っ青なグーグルで絶対黙っていましたよ。役員も、これまでだったら、「勝手に一人の人間が言ったことだから」となあなあで済ましてきていたのが、全部むき出しになってきたところがありますよね。

ケイン それはいいことですか？

海部 それはまだわかりません。まだ落ち着くところに落ち着いてないような気がしますね。

ケイン また女性でさらにアジア人という立場もいまは複雑ですよ。日本人は黒人やヒスパニックの人たちみたいに露骨な差別は受けませんし。

海部 自分の最初の本にも書いたのですが、国勢調査の民族ごとの結果を見ると、世帯所得はアジア人が一番高いのですよね。そういう立場だと、マイノリティだから弱きもの団結せよという感じにもなれないですし、どうすればいいのだろうというところがありますよね。

先ほどのオハイオに営業に行ってきたのですが、アジア人の女性が一人でホテルのレストランでご飯を食べていると、みんな見るわけですよ。差別されたり、罵られたりするわけではないのですが、ものすごい異質感を持って扱われている感じはしますよね。だからメールが来ないのも、「変な奴から変なメールが来た」とただ黙っているだけなのですよ。



美知さんの著書。『パラダイス鎖国 忘れられた大国・日本』
(アスキー新書)

ケイン 1年前までだったら、気のせいだろうと思って、おしまいにしてしていただいたと思いませんか？ トランプ政権になってから、世の中変わりましたよね。

育児と仕事の両立の難しさ

海部 表立って女性差別なんだと思うようになった理由の一つに、白人の男性と同じ立場の女性がセールスコールをしたときの反応率が全然違う、という調査結果があります。

その調査結果を報じた記事は「女性だからプロダクティビティーが低いというのは理不尽である」という内容で、こういうことがあるんだと思いました。

ケイン それから、女性はどんなにキャリア志向で頑張っても、出産すると男性と同じように働けないという意見も聞いたことがあります。

優先順位が変わってくるということもありますが、アメリカはそこまでまだ平等ではないので、結局は育児の負担は女性にかかってくるのだと。「仕事に150%精を出したくても出せない状況のなかで、客観的に男性と女性の実力を比較すると女性は成果を出せていないのは確かだ」という女友達もいます。

でもだからと言って、グーグルのメモの指摘が正しいかというそうではなくて、もっと根本的なところでアメリカも変わらなければいけないと思います。

そういう意味で、トランプの過剰発言やそれに刺激されて本音を吐露する人たちは、結果的にこの国の外面を剥がしているということなのではないでしょうか。

海部 確かに。ヒラリー・クリントンが国務長官だった頃の国務省政策企画本部長だったアンマリー・スローターさんという方がいらっしゃるのですが、プリンストンの国際政治の教授でもある彼女の講演を何度か聞きましたし、直接話をしたこともあります。

彼女はヒラリーの国務省の任務を途中で辞めたんですよね。理由はティーンエイジャーの息子が学校で問題を起こすようになったから。

その時の心理を聞き、共感しました。彼女の旦那さんもプリンストンの教授で、アンマリーが政府に転職するときに二人で話し合っ、子供の面倒は主に旦那さんがみるということで合意したそうです。学校で怪我をしたり、なにかあった場合は父親に連絡が行き、彼がに仕事を中断して迎えに行きますと、二人とも納得して決めたいらしいのです。

でも、息子が情緒不安になり問題を起こすようになったら、結局、アンマリーが子供を優先し、仕事を辞めざるをえなかったそうです。裕福な家庭だし、ベビーシッターにも来てもらったりしていたそうなんですけど……。

ものすごく葛藤し、誤解もされ、「しょせん女は……」という言われ方もされたそうです。それをどう解決したらいいのか、彼女もまだ答えがなかったですね。



美知さんと二人の息子さん。2003年

ケイン 現在、我が家でドイツから来た留学生の15歳の女の子を1年預かっているのですが、日常的な面倒を見ているのは私です。主人も、私の仕事のために2回引っ越してくれましたし、自分のことを先進的だと思っていて、彼女が来る前は「自分もやる」と言っていたのです。

でも細かいケアはできないから、私がやる羽目になりますね。仕事と子育ての両立って難しいなとすごく感じてます。

海部 時間的な問題だけではないですよ。精神的な優先順位だとかもありますね。

ケイン 昨日は、洗濯物を彼女はいつ洗うのだろう、何か言ったほうがいいのか、放っておいてもいいのかと悩んだり、Facebookで友達にアドバイスを求めたりして、半日を無駄にしてみました（笑）。

海部 そっちのほうでエネルギー使ってしまいますよね。アメリカは実力主義だからこそ、女性がハンデを負ってしまっている部分があり、やっぱり女性が低い地位に置かれているという現状があると思います。

ヨーロッパで女性が活躍している国は逆に社会主義的な枠をはめてしまって、男性にハンデをつけて、平等を実現していますよね。

アメリカは実力主義だからこそ辛いというところはあると思います。

ケイン 美知さんの場合もそうでしたか？

海部 正直私はこの20年ぐらい、子供が生まれてから自分を抑えてきたと思います。主人は出張に行くことも多かったので、私が家にいて子供の面倒を見る立場になっていましたね。どうしても私のほうが時間やエネルギーとられていました。

ケイン 結局、アメリカでも建前は男女イコールだけど、全然イコールではないですよ。

海部 でもある程度は、現実問題として仕方がないと思います。アンマリー・スローターさんみたいにギリギリのところまでプッシュしても、やっぱりそうなってしまいますからね。

ケイン シリコンバレーで活躍している女性は、表向きはキラキラしていて素敵だなと思う方でも、ちょっと知るとけっこう家庭内状況がめっちゃめっちゃな人が多いですよ。結局はどっちかが犠牲にならなければいけなくて、アメリカでもそれはほとんどの場合が女性ですよ。

海部 じゃあどうするのっていうと、わからないですけどね。

ケイン 美知さん宅は典型的な日本人の家庭ではないですよ。ご主人に出会われて、ご結婚されたのはアメリカですよ。最初から半分アメリカンな家庭だったのですか？

海部 そうですね。ベビーシッターも雇ってましたし、それこそ主人は自分のことを先進的だと思っていますよ。二人ともフリーランスだから時間の自由も利くというのもあって。残業だとか通勤だとか心配しなくて良かったですし。それでも、なおかつ自分を抑える結果になってしまいました。

「譲歩してきた私の人生はそれでもよかったのか」といまから振り返って思うこともあります。そのときは「仕方がない、目の前にベビーがいる状態で置き去りにして、ホイホイ出張に行けないよね」って思っていました。

でも後から考えて、フリーランスはいいとずっと思っていたけれども、私ってもしかして、自ら「マミートラック」に乗ってしまったのかなと、ふと思いました。

ケイン 美知さんはアメリカに移住してもう30年になりますよね。私は子供の頃からこっちに住んでいたの、ちょっと状況は違いますが、それでも住んでいる年数はそう違います。私は日本には合計9年住んでいたの、アメリカは通算34年です。美知さんはこちらで永住されるのですか？

海部 いろいろ考えているのですが、私としては10年ぐらい日本に住みたいと思っています。ヨレヨレになったらアメリカに戻ってきて、最期死ぬときにはたぶんこっちにいますね。

ケイン 普通の日本人と逆ですよ（笑）



7月28日に開催された「Japan-US Innovation Awards」にて、大賞受賞者のパネルのモデレーターとして登壇した美知さん

海部 子供がアメリカに定住するし、年をとったときには子供がいるところのほうが良いと思っていますが、ようやく子供が手を離れ、優先順位も関係なくなったので、そろそろ日本への引っ越し準備を始めたいと思っています。

いま57歳でもうすぐ60歳ですよ。日本に住もうだとか、日本に行ってこういう仕事をやろうだとか普通は思

わないかもしれないですね。でも一つ思うのは、現代は人生80年ぐらいになっているから、時期を外しても、なんとかリカバーできるかもと。

子供を産む時期と、仕事でプロダクティブな時期というのはかなり重なっていて、女性のキャリア計算で言うところには致命的に辛いですね。そこを私は自営業という形でマミートラックに乗ってしまって、細々とは続けていたけど、フルポテンシャルの仕事はしていなかった。

でも幸い寿命が延びたから60歳になっても、これからもうひと回り、10年ぐらいの単位のプロジェクトを考えられるようになりました。

そう考えると夫婦の間でどちらかがキャリアを諦めなければいけないという深刻な状況を軽減できるのかなと最近思います。

——美知さんは日本に帰国したら、女性管理職がより注目されるようリーダーシップ的な役割を担いたいと話してくれた。美知さんも私も、米国のビジネス界にある性別をめぐる偏見や差別への解決策を見出せないでいる。それでも私は彼女の志に大いに刺激を受けた。私たちはとにかく、この先も頑張り続け、何とか前進するほかないのだ。

[ケイン岩谷ゆかり](#) [連載バックナンバーはこちら](#)

COURRIER
JAPON